



2005
ピッポ新聞
 5
 No.199

年間購読料 (送料込み) 1500円
 編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3
 TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>
 Email pippo@diana.dti.ne.jp

山里からの便り

前略

今泉さん訳の『森の生活』を読み終えました。神吉三郎氏の訳のより、読みやすかったけれど、「シートン」の評伝のようにスラスラとはいきませんでした。これはもう、ソロの文章のくせによるものなのでしょう。

いずれにしろ、この二冊は「十五少年漂流記」「大地の子エイラ」とともに、僕の本棚に永遠に並べられる事になります。

シートンは次世代に伝えるべきものをインディアンに見たならば、僕は山村生活ということになります。

さて、ネイチャースクールの件、宜しくお願ひします。

「ピッポ新聞」の創刊号をあらためて読んでみて、ここでの生活の一つの区切りになったと感じています。十九年もかかったかかって感じですね。

今のところJTBパブリッシング発行の「大人の遠足マガジン」とアルファアイジェンシーの「田舎に暮らす・リゾートに暮らす」の夏号にイベント情報として載ることが決まっています。他に、「ビーパル」「岳人」「山溪」にも掲載依頼しているところです。

セブリ舎ホームページも作った。(公開は五月

中になります) 自然体験推進協議会 (CON) のホームページにも載せます。後は県内の登山用品店、大学にチラシ配りをするつもりです。東京にも足を伸ばすつもりですが、農大くらいしか頭に浮かびませんが。美術系はいくらでもあるんですけどね。

と、いうわけで思いつく宣伝はやっていのですが、何か他によい宣伝の仕方があったら教えてください。

敬具

伊藤さんへ

佐久間

「山里の便り」を寄せていただいている佐久間雅哉さんが、セブリ舎ネイチャースクールを立ち上げました。

佐久間さんは山梨県の増穂町の山里に暮らして十九年になるそうです。この間に山の技術を習得して、念願の自然スクールの立ち上げたのです。昔から伝わる山の技術は人間の知恵が凝縮されています。例えば木を一本倒すにしても、智恵と技術が必要ですが、それが今や廃れようとしています。何とも惜しい限りです。

佐久間さんはそれを広く伝えようとしています。興味有る方、是非にという方は参加してみたいかがでしょう。

セブリー舎ネイチャースクール

『山の暮らし』

自然との関わりから生まれた技術と文化の再発見

体験プログラム「森の生活術講座」 差し掛け小屋で野宿する！

森はそこに暮らす動物たちに生きていく上で大切な物を与えてくれます。食べ物や水、ゆつくり休むところ、外敵や嵐からも身を守ってくれます。そして、そこで子どもを育て次の世代につなげていくのです。

私たち人間もそうでした。つい 年位前までは無数の集落が日本中の山の中にあつたのです。人は都会に流れ、目を見張る技術革新がなされ今の繁栄を築きあげたのですが、森に置き忘れたものも少なくないようです。

「森の生活講座」は林業を糸口に自然との関わりをどう今に活かし、未来につなげるかを探るため、実際に森の中で差し掛け小屋を作り、寝起きしようという講座です。忘れてきた何かを見つけることができるかもしれません。アウトドアの好きな方、農林業に興味のある方、ご自分の山林の手入れをしたいと思っっている方などのご参加をお待ちしております。

募集要項

期間
1 7月 日(金) ~ 7月 日(日)
2 8月 9日(火) ~ 8月 日(木)
3 8月 日(金) ~ 8月 日(日)

参加対象 歳以上(高校生の方は保護者の同意が必要です)

募集人員 各回とも6名まで(定員になり次第締め切ります)

会場 山梨県南巨摩郡増穂町平林下河原地内森林

集合 JR身延線市川大門駅 AM11:30
解散 JR身延線市川大門駅 PM16:30
参加料 各回とも30000円

*食費(1日目の昼食は持参) 宿泊、保険料を含みます。

プログラムの内容

1日目 差し掛け小屋作り 木登り(ブリ縄で登る) 枝打ち体験
ロープワーク

2日目 山村ウォチング 茅葺き民家泊
作り 林内ワーク 差し掛け小屋

3日目 自然観察 下刈り 林内で野宿
蔓きり体験

*雨天のときは「山村生活体験」に一部変更します。

(荒天時は中止)
雨の中の自然観察 刃物のとき方・道具類

の仕立て
かまで飯を炊く 糶摺りを使った精米 草履作りなど

お問い合わせと申し込みは
森林工房セブリー舎 佐久間雅哉 (森林インストラクター 山梨県林業技能士)
山梨県南巨摩郡増穂町高下1473
0556(22)6479

E-mail sebur_i@navy.plala.or.jp



ねえー、この本読んだ？

『うさこちゃんとかあちゃん』 『うさこちゃんとはたけ』 (ディック・ブルーナ・作 まつおかきょうこ・訳 各 630 円 福音館書店)

「うさこちゃん」シリーズの新刊です。うさこちゃん(ミッフィー)が誕生して五十年だそうです。この2冊はそれを記念して新しく翻訳されました。訳者も石井桃子さんから松岡享子さんへ変わっています。単純明快な訳で、生まれてくる赤ちゃんをうさこちゃんごと



んなに喜んだかを、お楽しみください。

『くまくんの はる なつ あき ふゆ』 (なとりちづ・文 おおともやすお・絵 各 630 円 福音館書店)



「おはなつみ くまくんの はる」「はたけづくり くまくんの なつ」「どんぐりひ るい くまくんの あき」「ゆきあそび くまくんの ふゆ」の4冊セット (分売可能) く

まくんが四季を通じて自然と関わって遊ぶ姿をテーマにしたおはなし。同じおともやすお・絵 渡辺茂男・文のくまが主人公の絵本シリーズに比べると、今回は少し軽快というか、甘いというか「？」をつけた感じもします。さて、みなさんはどうお感じになりますでしょうか？

『しきしきむらの はる』 (木坂涼・文 山村浩二・絵 945 円 岩浪書店)



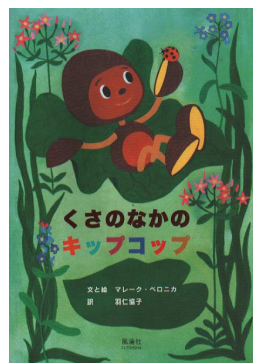
これも四季ごとに出される絵本シリーズらしい。「しきしきむらの なつ」の2冊が同時発売。シリーズで出版は別に悪いことと思いませんが、出しやすいのでしょうか？一度四季の4冊シリーズ化されて

いる絵本の特集を企画してみよつかな。この絵本のテキストは詩人・木坂涼のリズミカルな文でスイスイという感じで、読み手もリズムカルにページを繰ることができて楽しい絵本です。言葉に興味を持つ2歳ぐらいからお薦めです。

『くさのなかのキップコップ』 (マレーク・ベロニカ・作 羽仁協子・訳 1260 円 風濤社)

ベロニカはハンガリーの絵本作家で、「ラチとらいおん」の作者。キップコップはトチの実でできた人形で、台所

に住んでいます。冬眠(?)から覚めて、草原に出かけともだちを捜しました。ようやく出会ったのがテントウムシ、ところが、どこかに飛んで行ってしまったの



です。キップコップはさがしにでかけますが・・・。

『ぼくの鳥の巣 絵日記』 (鈴木まもり・作 1470 円 偕成社)



これは作者が移り住んだ山里で暮らしながら、住まいの回りに巣を作って子育てをする野鳥たちの様子を、描いた絵本です。作者は、世界中の鳥の巣を観察して、鳥の巣の図鑑

などをだしています。ですから、この絵本も野鳥の観察を丹念に描いているのですが、巣を中心に据えているところがユニークです。鳥に余り詳しくない僕が感心したのは文章の横に描かれている植物がとても参考になったことです。「あそつか!この植物の新芽のころにこの鳥が移ってくるのかと、この花が咲いている時期にこの鳥は巣

作りをするのか」つというように、植物を通して鳥の季節感が理解できたことです。

『ヘンリーやまにのぼる』(D・B・ジョ
ンソン・作 今泉吉晴・訳 1260円
福音館書店)



この作者は「ウォールデン 森の生活」を表したナチュラリストのソローに共感し、ヘンリーシリーズを描いたのですが、これはその3作目。

今から150年前、ソローは当時まだ存在したアメリカの奴隷制に反対して、税金の支払いを拒否して逮捕されてしまいます。逮捕は1日だけだったようです

が、ソローにとつては牢屋の中にあつても、心は縛られることなく自由に羽ばたいていたのです。そのときのことをこの作者ジョンソンが絵本にしたのが本書です。ソローのこの「市民の不服従」という考え方は、ガンジーやキング牧師にまで伝わる思想で今も生きています。ところで、この国の市民たちは何と従順なことが。権力に抵抗する権利を放棄してしまつたのでしょうか？

この絵本を大人にも読んで貰いたいな。

編集後記

「ピッポ新聞」200号を前に

気付いてみれば、来月6月号で「ピッポ新聞」が200号になります。年月に換算すれば、16年と6ヶ月、自分ながらよく続けられたと思います。13年ほどは手書きで発行していましたが、せめて人並の字を書くことが出来れば、それでも良かったのですが、自慢ではありませんが(恥ずべき事)金釘流の最たるもの。パソコンへ向かうようになってからは、そのボロを出さずに見えますが、いかんともしがたいのが稚拙な文章です。

でも、時々、書いたことへの反応や、ご意見や賛意などをお聞きすることが一つの支えとなつて何とか続けられたのだと思います。

子どもの本屋の情報誌としては、本に関することをもつとたくさん掲載し、読者のお役に立つことを心掛けるのが本来の姿なのでしょうが、最近でこそ少なくなりましたが、当初は溪流釣りのこと、山登りの事が多くを占めることが再三でした。中にはそれが面白いと言ってくれる人がいたりするものから、こちらはいい気になって、ますます書き続けたりしたものでした。

そうそう。手書きの時には、約束事など無視して、枠をはみ出して、縦書きのはずが、横書きになり、いつの間にか斜め書きになったりもしたものでした。

ところで、今月「山里の便り」を寄せてくれた佐久間さんとは、佐久間さんが清水にお住まいの時に、子どもが保育園でいっしょだったことが縁で、おつきあいが始まり(飲み友だちになり)、増穂町の山里暮らしを始めたのを切っ掛けに、お願いして「ピッポ新聞」にその暮らしぶりを「山里からの便り」として寄稿していただきました。それは現在も続いています。ちなみにかつて佐久間さんが結城座の舞台道具や美術を手がけていたことをしていただきましたので、ピッポの店舗の改装をもお願いし、現在の店に生まれ変わりました。

その佐久間さんはピッポ新聞を1号から現在までファイルしてくれているそうですが、発行者のぼくは、1年前の号ですら手元にあるか怪しいのです。子どもの本専門店としては、28年が経つたのですが、これからもボチボチと、細々と、続けていきたいと考えております。「ピッポ古書クラブ」もさらに力を入れていきますので宜しくお願いたします。

さて、来月の200号を記念して、「ピッポ新聞」紙上と店で記念ミニ・フェアを考えました。フェアのタイトルは「3人のナチュラリスト」ということでソローとシートンと今泉吉晴さんを取りあげ、店では3人の著書を中心に展示して売ることと、シートンの古書を展示したり、アメリカのソロー協会のグッズなどの展示を考えております。丁度6月に福音館からシートンの新しい動物記も発売になるのでこれに合わせたフェアです。どうぞご期待下さい。そして店に足を運んでください。お待ちしております。(フェアは6月中旬から予定)